

■ 将来開設が予定されているアートセンターを想定しながら、議論を深める。

項 目	発 言 要 旨
<p>1 アートマネジメント アートマネージャー ビジネスマネジメント ビジネスマネージャー</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ アートマネジメントの視点を持つ人、これから育てていかなければならない人が専門家として働く場がここなのではないか。 ○ アートマネジメントは、アート作品なり、アーティストというものが生み出す状況・場づくり、そういうものを企画の段階から終わりまで、きちんと運営していくために必要なコーディネーションと、ファンドレイジング(資金づくり)と、アーカイブ(記録)など、0から10まで、一つの状況づくりを手掛け、それを支えることだ。実際に事業の内容を手がけるのは、アーティストだったり、専門家がいるのだが、実際に状況づくりのベースを作り上げて行く人間は、アートマネージャーという位置づけになると思う。 ○ アートマネジメントの中で、一番テクニックが必要なのはファンドレイジング(資金調達)だろう。そこを上手に出来る人は、アートマネージャーとして優秀な人だろう。お金がなくても、今までにないような状況をきちんと作れる人も優秀な人だと思う。 ○ アートマネージャーというよりも、ビジネスマネージャーという言葉を使いたいくらいだ。アイデアを製品化して、商品化して、恒常的に売れて行くシステムを作るということ。ビジネスにしたいから、自然に人が集まってくるということは自分の仕事としても分かる。単純にアートマネージャーを養成するということだけではなくて、その辺りのマーケットのこと、トレーダーのようなことも含めて考えなければならない。 ○ 行政と一緒にやるメリットは絶対にある。ビジネスマネージャーは行政の人でも良い。行政と民間が組んでやっていく。予算をつくるのは行政がプロなので、そういった部分に徹してもらって、このような助成がある、補助金があるという情報を知らせる役目も行政は負わなければならない。 ○ 助成金はものすごく種類があって、常に新しいものも出てきて、行政も全てを把握しているわけではない。どのような補助金があって、それをこのように使えば事業を上手く組み立てられるのではないかと、というようなことがマネジメントなのだろう。 ○ マネジメントとアーティストの持っている情報とが結びあうと、お金を出す方も安心だ。それが一番強いのではないかと。きちんとした施設があって、きちんと運営する人がいる。 ○ ビジネスマネジメントをちゃんとやらないと、芸術なんかない。マネジメント出来る人をどのようにするか。マネジメントもいろいろなレベルがあって、おそらく細分化していくと思う。市民の人たちに入ってもらってやっていく、アートソムリエなんかはマネジメントの一部だ。それをうまくプログラム化したり、ワークショップを行うことはとても重要だと思う。 ○ (市民劇団を大学が買い取って演劇教育に取り入れ、学生演劇とプロの劇団がそれぞれ興行をうち、役のオーディションを大学の先生、地元の役者等が受けにくる。このように、地元の人々の演劇活動の一部になっているピッツバーグの例のようにうまく組み合わせると、マネジメントと生涯教育とプロ養成ができる分野もある。
<p>2 人材の育成</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ アートディレクター、アートコーディネーターのようなアートに関する人材の育成機能だ。これが中心になるのではないかと。 ○ 専門的な勉強をした大学の卒業生が、アートソムリエになったり、アートコーディネーターになっていく場に、アートセンターがなければよいのだろう。 ○ アートNPOは、全国で1万件くらいある。その情報を知らなければ、学生に教えることもできない。 ○ アートセンターで、きちんと人材育成を考えて行くのであれば、大学の機能とは違う意味で、専門性の高い取組みができると思う。 ○ アートマネジメントを、やりたい人はいっぱいいる。作家としては向かないけれどアートに関わっていきたくてという人はたくさんいる。一般の主婦の方でも、そういったことに携わってみたいという方はいるのではないかと。 ○ 円卓会議の委員をやっているという話をすると、学校のお母さん方の中にも、分からないなりに興味のある人はたくさんいる。 ○ on the job training的なことで始まって、少しずつ収まっていくということだろうか。ちゃんとしたリーダーがいて、まだわけの分からない助手がいて、だんだん先輩から仕事を覚えて行く、そしてある程度仕事を任されてきて、10年20年たって一人前になっていく、そのような日本のやり方だ。古いかもしれないし、そのようなやり方だけでもいけないと思うが、かなりの部分でそのようなやり方があるって、教える側も自らのやり方を変えて行くということもあると思う。
<p>3 アートサポート機能</p>	<ul style="list-style-type: none"> (1) 情報の提供・ワンストップサービス・相談 <ul style="list-style-type: none"> ○ アートセンターの機能の一つは、情報提供機能だ。市内にどのようなアーティストがいるのか、どのような文化施設があるのか、どのようなアートイベントを行っているのか。そういったいろいろな情報を市民に提供する。 ○ アーティスト情報、場所の情報、事業の情報等のアートに関する情報を、ワンストップでアートセンターから提供できれば良い。 ○ 情報提供を核にして、橋渡し機能を持つ。アーティストバンクやアートソムリエが具体的にアートセンターの中でどう動いていって、どうやって10区と結びついて、アートの現場とどうつながっていくか。 ○ 例えばチラシをつくる時に、誰にどうやって作ってもらおうか、どのようなデザイナーや写真家を使うことができるかなどについて、ワンストップサービスの、きちんと相談できるような場所だ。 ○ アーティスト情報は、いろいろなコンペを仕掛けて、掘り出し作業をしていかないと、情報が古くなってしまふ。それを行政と民間が一緒になってやっていくシステムをつくっていく方向 ○ 全国から放送局のプロデューサーが来るようになる。コンテンツに困ったならアートセンターへ行けとなるようなことも夢ではない。 ○ アートセンターで、企業メセナ担当者への助成先についての情報提供から、今度の土日どうするかというときに、役に立つホームページを開発する。ホームページだけでもいろいろなことができるが、もちろん最後はフェイスツーフェイスで相談を受けながら、情報を伝えるということになる。 ○ 10区の担当者から、事業の企画の相談などを受ける。 (2) 作り手と受け手をつなぐ <ul style="list-style-type: none"> ○ アートの作り手と受け手をつなぐような機能を持つ。 ア コーディネート <ul style="list-style-type: none"> ○ 今一番求められているのは、コーディネート機能というか、いろいろなジャンルを横断して、企画をつなげたりコラボレーションしていく、文化を活性化していく部分が、圧倒的に札幌は足りない気がする。 ○ コーディネートというよりも、横断的に動ける人がいて、その機能に対して対価が支払われるとか、そういう機関がそもそもない。それを、やりたいと思っているし、行政主導というか、札幌という大きな地域の中できちんと機関ができるのなら、そういうところが担ってもらえたらうれしい。 イ 関心を持つ人(ファン)を増やす・広告宣伝 <ul style="list-style-type: none"> ○ 人材を育成する前に、関心を持っている人を増やすという機能もアートセンターは持っていると思う。公的な宣伝機関、協働宣伝機関のようなものがあるようでない。 ○ あるものを観に行ったら、それが、その人の趣味になるかもしれない。しかし、その入口が分からない。だから、ミシュランではないが、ガイドブック的なものがあればおもしろいという話は、学校のお母さん方からも出ている。入口があれば、いくらでもやりたいとか、いくらでも観たいと言う人はいっぱいいる。1人で探して、1人で何かやろうとしても、ちょっと難しいので、こういうものがある、こういうところがあるという提案があると、見つけやすいと思う。 ウ アートソムリエ <ul style="list-style-type: none"> ○ 今やっている中では、このお芝居がお勧めですよ、というようなことを市民と向き合って、的確にアドバイスできるようにする。そのためには、データを抑えておかないとできないが、アートソムリエは、何月何日にこのような催しがあるというだけでは不十分で、その人の好みに合った催しを紹介できるところまでいければよい。そのような能力は一朝一夕には身につかないので、育成するには相当時間がかかるのではないかと。

4	政策研究機能	○ アートに関する政策研究機能を持つ
5	連絡会議	<p>○ 一番スケールの小さな考え方をしたとしても、横のつながり、連絡会議的なものはあってもよいのではないか。委員は、実際にキーパーソンとなっている人を入れる。</p> <p>○ 集まって議論をしたり、情報を掘り返したりするのは大事なのだが、本当に何かを回していこうとするのなら、現場で動いている人間が一番忙しいのだが、現場の人間の声を広げるような協議会にするのが良いと思う。</p> <p>○ 実務者担当者会議のような形で、キーパーソンを確保すべきである。今度出来たものは動きそうだな、使い勝手が良さそうだなとみんなが思えば、実質的な機能が果たせるようになってくる。</p> <p>○ 最前線の人間は、目の前のことに追われているので、よっぽど自分にメリットを感じなければ、他に行ったり、他に情報を送ったりということがなかなかできない。だから、お客さんを回遊させていくというシステムができれば、みんながメリットを感じるようになる。ただ単に情報を共有してみんなで頑張ろうでは、だめだろうなという気はしている。</p>
6	アートセンターで働く人材	<p>○ 100%専門でアートセンターに詰める人と、自分の拠点を別に持ちながら兼務で行う人と、多分3つ、4つの職種が出てくるかと思う。</p> <p>○ 現場をリタイアしたが、経験はあるので、かなり安い賃金でも専門的な職場で働くという人もいよう。</p> <p>○ ここでいうアートセンターを前提とするならば、やはりここではプロだと思う。プロという意識がないと、ここでは成立しないと思う。その部分を特化するとか、分けるべきものが確立していれば、公募するなり、応募するなりして、そこで切磋琢磨して選抜された人たちが収まることによって、組織立って行く部分があると思う。間口を広く、誰でも出来ますよ、というのでは成り立たない気がする。</p> <p>○ on the job training的なことで始まって、少しずつ収まっていくということだろうか。</p>
7	アートセンターの進め方	<p>(1) ソフト事業先行 ○ アートセンターの建物自体は、出来るまで相当年月がかかると思うが、その前に、先行的にできるソフト事業は行っていきたい。</p> <p>(2) 準備室 ○ アートセンターが完成するまでの間に準備室を設ける。アーティスト情報、施設情報、マップをつくるという話もあるが、それらをきちんと動かせる機能、アートセンターができたときのことを意識して、ソフトの回し方をきちんと統轄できる機関が準備室にあってもよいのではないか。</p> <p>(3) 準備室長・センター長 ○ 準備室ができると、準備室長が必要だ。アートセンターは劇場ではないので、専門の芸術家がセンター長になるのとは多分違い、情報をさばけて、適材適所に専門家を配置できる視点を持った人が準備室長になり、そこに専門家がさまざまな情報を持っていくという構造になるのではないか。だから、誰がセンター長になるのかがとても大事になる。</p> <p>○ アートセンターなら、オープンなきちんとした議論を行って決まってくるのだと思う。例えば、札幌だけに人材を求めるのではなく一般に公募するとか。</p> <p>○ 準備室長が広い意味で調整して、実務者が積み上げてトレンドをつくる。</p> <p>○ 準備室長は、それを恣意的に行える権限がある。</p> <p>○ 恣意的に行うのだけれど、情報はオープンにし、評価もされる。任期もある。</p>
8	既存施設・人材との関係	<p>○ 今ある施設がどのように機能しているのかということの調査・検討が必要なのではないか。</p> <p>○ 今ある施設を十分にチェックして、それを補強するような、アートセンターと既存施設がお互いにうまく関係を作れるようなことを議論しなければならない。</p> <p>○ アートソムリエとか新しいタイプのアートコーディネーター以外は、札幌市にはすでにいる。公演に関するアートコーディネーターは、芸術文化財団にすでにいる。しかし、ビジネスの仕方が役所的なところがあり、本人たちも分かっているが、なかなか持ち出しでなければ自分の仕事ができないという形になっているのではないか。</p> <p>○ 人材育成、コーディネーターやプロデューサーの育成を行うために、高等専門学校を市立大学にしたはずだ。アートセンター以前に、そこが機能しているのか。</p> <p>○ 今持っている組織や人員を見直して、どのように使うのかというのが大きな課題ではないか。</p> <p>○ 既存の組織の人的資源に、いかに再働きしていただくか、そこまで踏み込まざるを得ないかもしれない。</p> <p>○ アートセンターと関わることによって、ちえりあも変わっていく、芸術文化財団も変わらざるを得ない。</p> <p>○ 行政的に、部署の異なる文化芸術関連事業、例えば国際短編映画祭、アーティスト・イン・レジデンスなどに、アートセンターがどうからんでいくのか。</p> <p>○ 芸術文化財団をうまく使ってほしい。より良い仕事をしてもらうということを考えたときに、このアートセンターで何ができるのか。</p>
9	その他、アートセンターのイメージ	<p>○ 対象とするアートについても、札幌が国際都市としてやっていくためには、古典分野も必要ではないか。</p> <p>○ 教育委員会や企業との協働という点で言いたかったのだが、アートセンターで全部作るのではなく、アートセンターは、ビジネス、教育ビジネスを回し、それをコントロールする。それは非営利を含めたビジネスだ。現場は別にある。そのような展開になってくるのではないか。</p> <p>○ 実技系では、札幌には、マスコミの放送芸術を含めた民間の専門学校もある。音楽関係も力がある。ファインアートとビジネスの放送現場ですぐ使えるような人間づくりというような、その辺りは余り峻別しないでやっていく。</p> <p>○ いろいろな人材が出会い、変わって、組織も変わっていく。芸術文化財団も徐々に変わっていく。学芸員さんたちもアートセンターと関わることで、自分の機能を変えていく。大学の先生も変わっていく。そのような自由な発想で始めていいと思う。</p> <p>○ 財源とビジネスが絡んでいくような、その辺りは設計のしがいがある。</p> <p>○ アートの産業化ということでは、いろいろな部分で食べていける要素をつくる。例えば、公共建築のモニュメント、空間設計を誰が行うのかということにかかわってくる。経済効率だけの見積もりだけで決めないで、市としてきっちりアートの部分とかかわっていくということは大切だと思う。</p> <p>○ ある大学ではじめた、君の椅子プロジェクトというのがある。これが東川と剣淵と、愛別にひろがり、アーティストもやりたいと手を上げるというような、広がりを持つプロジェクトメイクもできると思う。</p>